

丸雪小雪（下）

泉鏡花作

明治三十二年七月

汽車

雲烟過眼、箱根も桶狭間も關ヶ原も、硝子窓から
駈抜けるやうながら、分秒にして長距離を行くこと
なれば須臾の間に趣變る、汽車の旅亦をかし。

嘗て上京の途なりき。家を出づる時は雨雲の氣勢
もなかりしに、一夜辰の口といふ温泉ある山間の村
に宿りしが、其夜中頃よりちら／＼と降出したり。
朝は風さへ加はりぬ。名にし負ふ雪國のことなれば、
一日に五尺三尺と積らむも計り難しと、白山風にお
もてを向けて、勇を鼓して出發せしが、ハヤ行く／
＼堆うなりて、腕車進まず、路わづかに七里にして
大聖寺に泊る。あくる日は既に腕車通ぜず、徒歩し
て福井にいたり、こゝにて聞けば敦賀に達する山越
の路鎖されたり。春日野の隧道損所あり、大良のが
け崩れたりなどいひのゝしる。市中にても湯に行く

さへまゝならずなりぬ。

籠ること三日半日、やうやく二日前の大阪の新聞
此地に來るにあひて、覺束なくも路一筋敦賀に通ひ
たるをうらなひて立出でぬ。幸に別條なく、金ヶ崎
に達すれば案外なり。恰も雪を排し得て、一番汽車
發すといふ。あくる朝彼處を發すれば満目皚々たり、
柳ヶ瀬、關ヶ原あたりにては、雪、路傍の小家を埋
む。

雪掻や蓑笠 u b y v 着たる大人數

いひつくすべくもあらず。實際は混雜修羅場の如
くなりけり。賤ヶ嶽のあたり見る目も凄まじかりし
に、其日午に至らず、長濱附近に來れば、白きもの
わづかに藪垣の間にかゝりて、桑も畝も皆黒し。こ
れはといふ間に停車場に入る、長濱は霏降り。米
原は寒烈しくして、たゞ天の曇れるのみ。いとをも
かしきは、岐阜、大垣に着けば、比較的天日赫々と
やいはむ、一點の雲もなかりしならずや。而して列
車の屋根よりは雪のとけて落つる霏雨の如くなり。

行違ふ汽車の旅客皆奇異の思をしつべし。小春日の
野の一方に三十里遠き國のツイ今しがた降れる雪を
汽車其處に被ぎてあるなり。師走十六日。

深々と雪を被げり終列車

汽車行くこと十里にして春の雪まばら

焼豆腐

長屋に夫婦喧嘩あり、かみさんなぐられて泣く。鄰家のもの行きてこれを慰め、其いはれを問へば、事もなき次第なり。シケにて肴はなし、野菜の新らしきもあらず、主人が好めるまゝ、毎日々々、焼豆腐ばかり煮て膳に上せしに、七日、八八日、十有餘日、知らず顔に意地の悪い、黙つてこれを食ひしが、二十日めの日曜に突然鬱憤を洩せるなり、「何處まで押を強く食はせやあがる、故と黙つて見て居たのだ、モウ堪らない。」と云々。之を牛込の先生に告ぐ、先生「主人は勤人かい」答へて曰く「ハイ」「これあるかな、左様な細君は宜しくなぐるべし、旦那のお菜に忠ならざる細君は買食をするのだ。」と世の細君等、豈此言を味はずして可ならんや。

景氣

「旦那御都合まで、」 「大塚まで幾錢。」 「牛込の揚場から二貫五百だといふ、最も大降にて眞暗なりし、夜は十二時過ぎなり、」 「十八錢ならば、」 「フム」 といつて應ずるものなし。

どん／＼橋を向うに見て、困つて歩行く、暫くすると背後から腕車を曳いて追懸け來れり、「私が参ります、召しまし。」 やがて膝かけを以て裙を蔽ひくれたる折から、二人ばかり威勢よく帳場より駈附けつゝ、「止せ止せ、ソんな處へ、」 「いくらも仕事があらあヤイ」 「景氣に觸るぜ、べらぼうめ。」

「だつてもう何だ、」 「えゝ、斷ツちまひねえ、親方がさういつた。」

「旦那、申譯がございません、北廓ならたゞでも参るんですが。」
と、恐入つた。

妄信

くろもじ嚙みノ、紅べにで書かく、こがるゝアの字じあり。
小指こゆびを喰切くひきつて鳥居とりゐに名なを書しよす本間ほんまなにがしあり。
我が友ともは或時あるときてんぶら屋やの二階かいにて杉箸すぎばしに醬油しやうゆをつ
け、塗盆ぬりぼんに數字すうじを書しよして、會計くわいけいの恥はぢあらしめざりき、
時ときと場合ばあひに因よるのみ、意志いしに於おいて輕重けいちゆうある事ことなしと
我われは信しんず。